

川口 隆行
広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座
〒739-8524 東広島市鏡山1-1-1
Tel 082-424-7051 / E-Mail koharu12@hiroshima-u.ac.jp

国際会議：核・原爆と表象／文学のご案内

時下益々ご清栄のことと存じます。国際会議／第49回原爆文学研究会を下記の要領で開催いたします。皆さまには、ご多忙のことと存じますが、万障お繰り合わせの上お集まりくださいますようお願い申し上げます。

会場・資料の準備の都合もありますので、参加をご希望の方は2015年12月4日（金）までに福岡大学・中野和典（※詳細2頁下）までご連絡ください。

記

国際会議：核・原爆と表象／文学 ——原爆文学の彼方へ——

International Conference: Nuclear Technology and Its Literary Representations
—— Beyond Atomic Bomb Literature ——

- 期日：2015年12月12日（土）・13日（日）
- 会場：九州大学西新プラザ大会議室（福岡市早良区西新2-16-23 Tel 092-831-8104）
- プログラム

【1日目】12月12日（土）13:00～17:50

12:00 開場

13:00 開会の辞（趣旨説明）

川口 隆行（広島大学）

13:20 **【セッション1 移動する原爆—文学】**

司会 中谷 いずみ（奈良教育大学）

「投下する」側の「記憶」
—— 2015年・日本からの再検証

島村 輝（フェリス女学院大学）

核時代の英米文学者

齋藤 一（筑波大学）

—— Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (1946) の日本語訳 (1950) について

ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』
—— 大田洋子と「ネイティヴ・サヴァイヴァンス」

松永 京子（神戸市外国語大学）

コメンテーター 吉田 裕（東京理科大学）

中野 和典（福岡大学）

16:00 休憩

16:20 **【特別講演】**

司会 李 文茹（淡江大学）

大海に浮かぶ夢と放射能の島々

シャマン・ラポガン（小説家）

コメンテーター 高野 吾朗（佐賀大学）

17:50 1日目閉会

18:00 懇親会 九州大学西新プラザ展示コーナー

【2日目】 12月13日（日） 10:00～16:40

10:00 【セッション2 原爆を見る】
原爆写真というメディアと〈詩〉

司会 楠田 剛士（宮崎公立大学）
野坂 昭雄（山口大学）

「キノコ雲」と隔たりのある眼差し
—— 戦後日本映画史における〈原爆〉の利用法

紅野 謙介（日本大学）

「核の不安」から「核の無関心」へ
—— アメリカのポピュラーカルチャーにおける核のイメージの変容

マイケル・ゴーマン
（広島市立大学）

コメンテーター 岡村 幸宣（原爆の図丸木美術館）
鷺谷 花（早稲田大学演劇博物館特別招聘研究員）

12:40 休憩

14:00 【セッション3 冷戦文化と核】

司会 川口 隆行（広島大学）

核と自由
—— 1960-1970年代の日米における公民権／反戦／反核運動

アン・シェリフ
（オバリン大学）

〈核のない平和〉と〈核による平和〉
—— 冷戦期日本の平和論と安全保障論から

山本 昭宏（神戸市外国語大学）

コリア核マフィアの始まり
—— 雑誌『学生科学』（1965）を中心に

林 泰勲（韓国朝鮮大学校
人文学研究院PD）

コメンテーター 市川 浩（広島大学）

高 榮蘭（日本大学）

16:40 閉会の辞（会議総括）

長野 秀樹（原爆文学研究会
世話人代表・長崎純心大学）

- 主催 科学研究費（基盤B）「核・原爆と表象／文学に関する総合的研究」（代表 川口隆行）
原爆文学研究会（第49回例会）

会場のご案内



福岡空港から地下鉄
「姪浜」行き乗車
約20分

博多駅から、地下鉄
「姪浜」行き乗車
約15分

→いずれも「西新」
駅下車、⑦番出口より
徒歩約10分（※「ガ
スト」を目印に曲が
り、川沿いの道を北
上してください）

申込み先詳細

この国際会議への参加をご希望の方は2015年12月4日（金）までにeメールかお電話で下記までお申し込み下さい。なお、申し込む際には①「1日目会議」、②「懇親会」、③「2日目会議」のそれぞれについて参加／不参加を明記してください。

【申込み先】 福岡大学人文学部・中野和典

eメール nakanok ● fukuoka-u. ac. jp（※「●」を「@」に替えて送信してください）

電話 092-871-6631（代表）

国際会議の趣旨

一般に、原爆文学とは、1945年8月の広島・長崎の体験者による文学を、のちには非体験者のそれも含みこんだ、日本文学の特異なジャンルと見なされてきた。しかしそうした見方は、広島・長崎に限定された経験を描いた「当事者」の文学として押し込め、あるいは、戦後日本という空間において原爆の悲惨さを伝えるもののみとして利用されることにもなった。こうした囲い込みから原爆文学の解放の可能性を探るにはどうしたらよいか。

【セッション1 移動する原爆—文学】は、原爆体験や記憶の移動、受容、変容という問題を通して、原爆と文学の関係をあらためて議論する。ある言語で書かれた文学が、翻訳や流通を通して、別の国や言語へテキストが移動する際に、どのような文学的・思想的反響や展開があったのか。さらにそれは原爆体験や記憶にどのような新たな意味を生みだしているのか。

核廃棄物貯蔵施設のある台湾・蘭嶼に住み、反核・先住民運動と創作活動を続けるシャマン・ラポガン氏の【特別講演】は、核や原爆と文学の関係についてさらに深い問いかけをもたらすだろう。

【セッション2 原爆を視る】は、映画、写真、絵画などが生み出す表象、メディア性を議論する。字義的に原爆文学を解せば、それは言語表現を意味する。しかし、「文学」と「非文学」の境界はどこにあるのか。文学というメディアが生み出すイメージやメッセージは、異なるメディアとどのような交渉や関係を持ち、どのような新たなイメージやメッセージを生み出したのか。

核や原爆が、文学や視覚表現などで具体的にどのように表現され、受け止められたのかという議論はもとより大事だが、ある空間において、個人や集団が心のなかで思い描き、保持し、更新する「物語」というレベルにまで議論を拡げる必要がある。文字や映像で語られる、あるいは日本語、英語、中国語、韓国語で語られるといったこと、そこで起こる出来事を含めた文化事象全体を論じる視座としての「想念のうちなる核・原爆物語」、認識枠組みとしての「メタ原爆文学」である。こうした問題と関わるのが、「ディスクール」(言説)である。

【セッション3 冷戦文化と核】は、国際的な地政学を踏まえ、冷戦期における核をめぐる言説とその布置、それを介しての文化や社会のありようを議論する。「想念のうちなる核・原爆物語」をつくりだすディスクール、それらを含めた空間のディスクールの問題を前景化することは、原爆文学を支えてきた枠組みをとらえ直すことにもつながるのではなからうか。

原爆文学とは、1945年8月の惨劇とそれに続く現代という時代に向き合うために、先人たちが発見した世界認識の方法をめぐる仮構意識といってもよい。だからこそ、これまでも不断にそのありようを問い続け、問われ続けてきたのであって、いずれもっと大きな認識の方法、意識の回路を見つかることができれば、原爆文学という言葉それ自体は手放される日が来るかもしれない。核や原爆にまつわる表象／文学は、どのような歴史的、社会的条件のもとで生み出され、読まれ、位置づけられたのか。それに関わった多くの人たちは何を思い、生きてきたのか。それらを議論することは、原爆文学という言葉の彼方に位置する無数の存在を含みこんだ、「私たち」のありように思いをめぐらすことにもなるだろう。

報告の要旨

【セッション1 移動する原爆—文学】

1. 「投下する」側の「記憶」——2015年・日本からの再検証

島村 輝

先日、東京・赤坂で、新進の写真家・新井卓の制作した「49 Pumpkins」という映画の上映会が催された。新井はダゲレオタイプの技法を伝える優れた写真師であるとともに、広島、長崎と福島を繋いで考えようとする、意欲的な表現者でもある。「49 Pumpkins」は、戦争中に原爆の予行演習として投下された49個の模擬爆弾の呼び名をタイトルとして、アメリカ合衆国に現存する、飛行可能なB-25爆撃機を実際に飛ばし、そこから49個のカボチャを投下する様子を、機内と地上から撮影した映像を中心に作られた作品である。その中にクロード・イーザリーの名が挙げられ、彼への献辞が付けられていた。

1945年8月6日未明、北マリアナ諸島のテニアン島北平地を飛び立った「特別ミッション13」のB-29戦闘爆撃機は、直接に広島に原子爆弾を投下したエノラ・ゲイ(Enola Gay)を含め7機だった。この時広島気象偵察の任務を負ったのが、ストレート・フラッシュ(Straight Flush)であり、その機長兼操縦士がクロード・ロバート・イーザリー少佐だ

った。除隊後の彼は広島への原爆投下に激しい罪の念をもったとされ、その暴露と弾効のためとして、犯罪に手を染めることさえた。一方、広島原爆投下の任務を負った「特別ミッション13」7機、要員合計71名の中で、「原爆投下」に激しい罪の念をもったと伝えられるのは、このイーザリー一人である。

原爆投下した米軍飛行兵を描いた小説としては堀田善衛の「審判」（1963）がある。また、イーザリーの手紙をまとめたのは、ギンター・アンデレスであった（*Burning Conscience*, 1961、邦訳『ヒロシマわが罪と罰-原爆パイロットの苦悩の手紙』1962）。彼の思想は、一時彼のパートナーであったハンナ・アーレントの再評価同様に、今日見直されて然るべきかと思う。イーザリーの行動と告白、アンデレスの思想、堀田の文学、そして現代の新井卓の写真や映像を見渡しながらか、20世紀後半から今日にかけての文明論的展開のなかで「原爆」や「戦争」を考えてみることであればと考える。

2. 核時代の英米文学者

—— Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (1946)の日本語訳 (1950) について

齋藤 一

Herman Hagedorn (1882-1964) はアメリカの詩人・伝記作家であり、アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの伝記 (1918年) で有名であるが、1946年に *The Bomb that Fell on America* なる長詩を発表したことで知られている。

「広島に落ちた爆弾はアメリカにも落ちたのだ」(第1部第3節)、「この恐ろしいものを人類にけしかけたのは一体誰だ。／我々も知り、天地も知る。／それはアメリカだ」(第1部第6節)と読者に訴えるこの長詩は、1950年12月に法政大学出版局よりハーマン・ハゲドーン『アメリカに落ちた爆弾』として翻訳出版された。翻訳者は法政大学教授の入江直佑 (1901-1991)、出版経緯などを記した「あとがき」は谷本清 (1909-1986)、「ハゲドーン氏のこと」という紹介文は相馬雪香 (1912-2008) であった。この翻訳がハーシー『ヒロシマ』(法政大学出版局、1949年)の翌年に出版されたことをも考えると、ハゲドーンの詩は谷本清と法政大学 (出版局) を中心とした人的ネットワークの中で日本社会に紹介されたと考えて良いだろう。

他方、この長詩は雑誌『英語青年』でも紹介されていた。1949年6月号 (第95巻第6号) の「英語クラブ」で「ふとした機縁で此の書を作者から貰った」(37頁) 英文学者・池田義一郎が、この詩をかなり詳しく紹介しつつ、ハゲドーンに手紙を送ったところ、心に響く手紙だった、目下谷本清氏から翻訳の申し込みがある云々の返事があったと記している (同上)。谷本とは別のルートでもハゲドーンの長詩は日本に紹介されていたのである。

本発表では、谷本や池田などのネットワークに注目し、1950年前後 (可能であればそれ以降) の日本におけるハゲドーン翻訳・受容について考察し、核時代における日本の英米文学者の営為の一端を示すことを狙いとしている。

3. ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』 ——大田洋子と「ネイティヴ・サヴァイヴァンス」

松永 京子

ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』には、大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』や井伏鱒二の『黒い雨』といった日本原爆文学が多々引用あるいは言及されている。そして、そのなかでも特にヴィゼナーの「平和」言説に対する批判を援護するものとして重要な役割を果たしているのが大田洋子のテキストである。主人公のローニン・アイノコ・ブラウンは、「大田洋子の勇気と堪え難い献身に敬意を示して」(118) 障子やちり紙に原稿を書く。これは、紙やペンがないので、「寄寓先の家や、村の知人に障子からはがした、茶色に煤けた障子紙や、ちり紙や、二、三本の鉛筆などをもらい、背後に死の影を負ったまま、書いておくことの責任をはたしてから死にたい」(12) と書かれた大田の『屍の街』の序を再現したものであるが、ローニンが踏襲したのは、『屍の街』執筆をめぐる形式的な側面だけではなかった。戦争混血孤児である主人公ローニンの過激な言動や、原爆で亡くなった子供たちに対する「共感的」理解は、『屍の街』「夕風の街と人」と「半放浪」「暴露の時間」といった大田作品にみられる扇情的なレトリックと被爆者に対する「共感的」理解を喚起しながら、既存の「平和」概念を解体しようと試みている。

だが、ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』は、日本の原爆ナラティブの系譜にとどまっていない。むしろ、大田のレトリックは、ヴィゼナー作品に通低するトリックスターや「ネイティヴ・サヴァイヴァンス」の概念に結びつけられることで、先住民文学のディスコースに組み込まれているのではないか。本論では、ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』と大田作品のレトリックに注目しながら、日本原爆文学と先住民文学のディスコースの関係を探ってみたい。

特別講演

大海に浮かぶ夢と放射能の島々

シャマン・ラボガン

講演者紹介：1957年台東東蘭嶼郷紅頭村生まれ。タオ (ヤミ) 族。漢名は施努来。中学を卒業後、台湾本島の高校に進学。原住民子弟対象の大学推薦制度を拒否し、一般枠で淡江大学フランス語文学科に進学、卒業後は台北でタクシードライバーになる。蘭嶼に放射性廃棄物貯蔵施設の建設計画がもちあがると反対運動に参加、1989年に家族とともに蘭嶼に帰り、タオ族の伝統的な舟造りや漁を学びながら創作活動をはじめ。国立清華大学人類学研究所修了。

人類学修士。邦訳作品に「黒い胸びれ」(『台湾原住民文学選2 故郷に生きる』草風館、2003)、「海人」、「漁夫の誕生」(『台湾原住民文学選7 海人・獵人』草風館、2009)、「神様の若い天使」、「天使の父親」(高樹のぶ子選『天国の風—アジア短編ベスト・セレクション』新潮社、2011)、『冷海深情—シャマン・ラポガンの海洋文学〈1〉』(草風館、2015)、『空の目—シャマン・ラポガンの海洋文学〈2〉』(草風館、2015)。みずからの作品を「海洋文学」と位置づけ、核の問題を直接扱うことはなかったが、自伝的長編小説『大海浮夢』(2014)や最新作『安洛米恩之死』(2015)では放射能汚染や反核運動にも触れている。

【セッション2 原爆を視る】

1. 原爆写真というメディアと〈詩〉

野坂 昭雄

原爆に関する言説の形態は、例えば1930年代の小説や詩の言説における身体の破碎とどのような接点を有するだろうか。押野武志は『文学の権能』で、モダニズムにおいて身体は「破碎」されるものとしてしばしば描かれたことを論じた。江戸川乱歩「パノラマ島奇談」、葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」、宮沢賢治「グスコブドリの伝記」などで描かれた破碎された身体は、その後のファシズム期における「玉砕」「散華」といったイメージへと受け継がれる。押野は、こうした点と、〈詩と散文〉というパースペクティブを接続しようと試みているが、発表者はこうした観点が原爆表象の考察にも有益だと考えている。

「玉砕」とか「散華」という記号は、それによってリアルな破碎から人々を遠ざけるようなイマジネールな(想像的な)作用を持っている。それはあたかも、私たちの身体が、何かしら統一されたものとして認知、感覚されているのと近い。ひとたびそうした統一性に罅が入れば、身体感覚がバラバラになってしまうという地点で、ファシズムのイデオロギーは巧妙に国民の身体の管理を行っていた。

これは、フリードリヒ・キットラーに依拠すれば、〈映画〉的な作用ということになる。では、写真というメディアによって原爆というカタストロフィを写し出すとは、いったい如何なることなのか。本発表では、鈴城雅文『原爆＝写真論』やテッサ・モーリス・スズキ『過去は死なない』などの議論を参照しながら、カメラの冷徹な視線が被写体を捉えるという行為と原爆という出来事との関わりを捉え直し、イマジネールなものに抵抗する〈詩〉的表象との接点を探りたい。

2. 「キノコ雲」と隔たりのある眼差し ——戦後日本映画史における〈原爆〉の利用法

紅野 謙介

原爆の爆破直後に沸き起こった巨大な「キノコ雲」の映像は、米軍機に乗っていた兵士たちによって撮影された。しかし、もちろん当時、広島や長崎の市内にいたものたちは誰ひとりとして見ることはできなかった。市外にいて生き残った被爆者たちの記憶にわずかな痕跡はある。しかし、それも「ムクリコクリ」(井伏鱒二『黒い雨』)というように、形容しがたい畏怖すべきものであり、クリアな「キノコ雲」ではなかった。それはまさに地上にいたものからは見えない、外側から眺めた映像であり、広がった巨大キノコ雲の下にいたものたちは名づけることさえ不可能だったのである。敗戦後、占領軍が次第に情報を公開するなかで原爆の視覚化が行われることになる。初めは記録映像として、ついで劇映画にインサートされる映像として物語に組み込まれていった。こうして原爆は、あとから戦後日本の眼差しにとらえられることになる。では、劇映画で原爆を映像化する試みはどのように始まり、また「キノコ雲」はどのように記号化されていったのか。描き得ない「空白」としての被爆体験を描くときに、どのような表現のしくみが作動するかをたどる。

3. 「核の不安」から「核の無関心」へ ——アメリカのポピュラーカルチャーにおける核のイメージの変容

マイケル・ゴーマン

本発表では、1945年の広島・長崎原爆投下の初期の詳細なレポートから、2011年3月東日本大震災における福島第一原発事故直前までの、アメリカのポピュラーカルチャーにおける核戦争・核災害の表象の変容を辿る。映画、テレビ番組、視覚・造形芸術、抗議のプラカード、パンフレット、ポスター、政治的劇画、漫画、インターネット、Fallout 3などのコンピューター／ビデオゲーム、といった多様な核のイメージを分析することで、これらがどのように特定の歴史的瞬間における核の現実やディスコースの影響を反映しているかを探る。

例えば、映画「フェイルセーフ」(未知への飛行、1964年)が1962年のキューバミサイル危機の緊張を反響する一方で、1989年に放映が開始された人気テレビアニメ「ザ・シンプソンズ」に登場する「ドジな」原発工場の従業員であるホーマー・シンプソンが、原発産業を風刺すると同時に、1986年に起こったチェルノブイリの未曾有の核災害によって引き起こされた恐怖を緩和していること、また、2011年に公開された映画「X-MEN: ファースト・ジェネレーション」において、ナチス・ドイツのホロコーストや冷戦——特に1962年のキューバミサイル危機——といった歴史が物語の背景として用いられながらも、ミュータントの脅威が核の脅威をはるかに凌いでいること、などに注目する。

1. 核と自由 ——1960-1970年代の日米における公民権／反戦／反核運動

アン・シェリフ

安保闘争後、作家・運動家である小田実と評論家・哲学者である鶴見俊輔はベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）の文脈のなかで様々な発言を行ったが、そこには、冷戦期における世界的市民運動と共通の意識と連帯についての興味深い視点が窺える。1966年のベ平連開催の全国反戦ティーチ・インでは、親米の小田と鶴見も当時の運動言説にありふれた反帝国主義・反植民地主義を唱えた。他方でそれは、1930-1940年代の世界戦争で目立った人権侵害の反省から1948年に作られた国連会議の「世界人権宣言」、その人権概念に対応しようとしていたとも言える。本発表では、広島でのベ平連のティーチ・インの、人権の言説を連帯の軸にしたレトリックを分析し、地元広島の参加者、被団協代表森滝一郎や地方紙中国新聞のジャーナリスト金井利博、それから米国公民権運動の黒人と白人の活動家、ベ平連のメンバーの連帯について問い直したい。人権侵害の体験を持つ被爆者代表と米国公民権運動家を、ベトナム市民の人権を訴えるベ平連におけるさまざまな人権概念の提供とも重ね合わせ、さらには運動と原爆文学の変容について考えたい。

2. 〈核のない平和〉と〈核による平和〉 ——冷戦期日本の平和論と安全保障論から

山本 昭宏

日本の一九六〇年代は高度経済成長と合わせて語られがちであり、それゆえにノスタルジーの対象にもなっている。他方で、「政治の季節」という呼称があるように、政治的争点が多く、社会運動も大きな盛り上がりを見せた時期でもある。しかし、本報告にとって六〇年代が重要なのは、憲法九条と日米安保という本来ならば相容れない要素を併存させる態度が、暗黙のうちに合意された（ようにみえる）のが、この時期だからである。では、六〇年代の日本社会における平和論と安全保障論は、核兵器をどのように位置づけていたのだろうか。

一九六〇年代前半、たとえば国際政治学者の坂本義和と高坂正堯の議論が示すように、革新派の反戦平和論も保守派の安全保障論も、ともに核兵器は否定されるべきだという前提を共有していた。しかし、中国の核武装により、そのような前提はほころびをみせはじめ、核抑止という概念がしだいに定着し始める。この核抑止論は、六〇年代後半に、朝永振一郎ら科学者たちによって厳しく批判されたものの、「核による（西側陣営の）平和」という論理は水面下で広がりつつあったように思われる。このとき影響力をもったのが、リアル・ポリティクスを標榜する一部の国際政治学者であった。他方、「核のない平和」を求める人びとも、反戦平和運動のなかから、非核構想を練り上げようとしていた。

上記のような過程を踏まえた上で、本報告では主に一九六〇年代の日本社会を対象に、核をめぐるメディア言説や知識人言説を考察する。主に、政治学者や科学者、文学者の言説を扱いながら、「平和」という概念（それもまた社会集団ごとに異なるわけだが）が形成され、定着する過程で、核兵器がどのように語られたのか、考察する。

3. コリア核マフィアの始まり ——雑誌『学生科学』（1965）を中心に

林 太勲

1960年代、朝鮮半島には原発が一基もない時代であった。しかし、この時期から朴正熙政権の原発建設計画はゆっくりと推進されることになる。アメリカの Westinghouse Electric Company は原発の受注を目標に韓国政府に対するロビー活動を続けていた。同社は駐韓米国大使館と文化院を使いながら、原発の必要性を広報するとともに、権力内に親原発派の養成を試みた。それから半世紀が経った今、朝鮮半島には原発が23基も稼働中であり、「核マフィア」と言われる人たちが政財界はもちろん、教育界、メディア界まで掌握している。

本研究では、韓国「核マフィア」のネットワーク形成が始まった1960年代を背景としながら、米国大使館と文化院の支援で創刊した『学生科学』（1965年創刊）に注目したい。これは青少年向けの教養雑誌のはずであった。しかし、この雑誌の企画編集委員をはじめとする主要な筆者は、後日、原子力安全委員会、韓国原子力研究院、韓国水力原子力株式会社の要職につくことになる。だからこそ、この雑誌は「韓国核マフィアの始まり」を追跡できる大切な手掛かりだといえよう。彼らは、『学生科学』を通して、韓国の青少年に核発電のことをどのように語っていたのだろうか。『学生科学』での活動の後、彼らは韓国の核資本主義にどのような影響を与えることになるのだろうか。この研究はその年代記を追跡するための最初の作業になるだろう。